2012年（平成24年）
第50号
（2月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

京都教会の平和活動２０１２

京都教会では、各種「平和活動」に取り組んでいる。平和活動の推進を担当する、渉外部の古田スタッフは、「今年度も青年部・婦人部を中心に協力の輪を広げるとともに、活動に取り組むことで『平和』の心を持ってもらえるようにしたい」と述べている。

《重点的に推進する３つの取り組み》

本年も「一食を捧げる運動」「アフリカへ毛布をおくる運動」「ゆめポッケ」の３つの活動を推進する計画だ。今後、それぞれの活動への協力を呼びかけ、世界中の人々が『平安』に暮らせるように支援していく。

【一食を捧げる運動】

この運動は、同じ地球に暮らすすべての人が、毎日笑顔で暮らせることを目指して、食事やおやつ、コーヒーなどをがまんして、その分を献金し、貧困、紛争、災害などに遭った人々への支援を行っている。

京都教会では、教会参拝者からの献金や、各家庭で取り組んで各支部で回収。街頭募金による一般市民への呼びかけといった活動を推進している。

今後は「地域で社会貢献に取り組む団体を支援する『地域応援プロジェクト』にも参加を目指す」考えだ。

【アフリカへ毛布をおくる運動】

毎年実施しているこの運動により、2011年度は、全国で約24,000枚の毛布と約2,300万円の海外輸送協力金が集められた。

なぜ毛布を”おくる”のか・・・、それは、毛布だけでなく”真心”を届けるためだ。紛争などで心も傷つき、悲観的になっている人たちに、日本から毛布とメッセージをおくることで、遠いところから自分達を想って、応援してくれる人がいることに喜びを感じるからだ。現地で毛布は用意できても、「心」は届けられない。印象的な表現だ。

今年のキャンペーンは、例年通り４月１日から５月末までの２ヶ月間行う予定だ。

【ゆめポッケ】

この運動は、戦争などで傷ついたり家族をなくしたり、悲しい思いをしている子供たちに、プレゼントや励まし、平和への祈りをつめたポッケを届けるもの。

本年も学習会が予定されていて、子供たちにも運動の理解を深め、親子で実施できるようにするという。特に、お父さんも一緒に参加してもらえるように検討されている。

キャンペーンは６月から。

お知らせ（３月の教会行事）

３月	１日（木）	９：00～	朔日参り
	１日（木）	19：30～	朔日参り夜間式典
	４日（日）	９：00～	開祖さまご命日
	５日（月）	８：40～	創立記念日
	５日（月）	19：30～	〃　夜間式典
	１０日（土）	９：00～	脇祖さまご命日
	１１日（日）	９：00～	東日本大震災犠牲者慰霊法要
	１５日（木）	９：00～	釈迦牟尼仏さまご命日
	２０日前後		春季彼岸会（各支部）

時事刻々

３月11日の東日本大震災犠牲者慰霊法要に向けて、全国の青年部員による犠牲者を供養する準備が始まった。京都教会では２月５日に行われた▼若者たちが、一心に故人の冥福を祈りながら、一人ひとりに思いをよせていた。この思いが亡くなられた方々に届くことを祈りたい▼以前、滝田洋二郎監督の「おくりびと」を見た。本木雅弘氏が演じる新人『納棺師』が周りの人に支えられ成長する姿を描いたものだ。人の死を別れと同時に新たな旅立ちとすることの大切さを見せられた▼本木氏は納棺の現場を見て「その空気感や与えられている喜びが出産によく似ている」と述べている。死者を見送ることで「人が人であるということの温かさと、清らかさ」を感じたという▼２月15日は『涅槃会』。釈尊入滅の日。仏教徒にとって大事な日である。人の『死』というものを通して、今を生きている私たちのあり方を考えていきたい。

新たな旅立ち　第４６回成人式

1 月 15 日、京都教会において、第 46 回成人式が行われ、7 名の成人者が参加した。

一部の式典では、読経供養、青年本部長メッセージ、成人者説法の後、佐藤教会長からの祝辞。その後、記念品贈呈、支部別法座と続き、法座では両親からのメッセージ披露で涙する成人者も見られた。

二部のレセプションでは、スパークルブラスの演奏、ティンクバトンの演技があり、お祝いの席に豆菩薩の笑顔の花を咲かせた。レクリエーションでは「道」をテーマに成人者各自が「今まで歩んできた道、これから歩む道」を色紙に書き披露した。最後に吉田 LEO 氏の演奏で全員大合唱し、歓喜のもと新成人を祝った。

さまざまな祈願も込めつつ寒中読誦修行

1 月 20 日から 29 日の 10 日間、京都教会において、法華三部経の寒中読誦修行（寒修行）が行われ、会員延べ 1,500 人が参加した。

今年は各地で厳しい寒波の中、記録的な大雪に見舞われる所が多かったが、京都教会では無事に早朝 6 時より会員一同が参集した。この寒い時期に、早朝からの寒修行に参加することで、強い精神力を養い、煩悩を祓うという。またその日その日を無事に迎えられることに感謝できるようになる。

今回参加した人の中には、本年の大学受験の祈願にために全日程参加した学生や、父の手術・病気平癒祈願の思いを込め参加した青年部員もいた。

最終日の挨拶に立った佐藤教会長は「法華三部経の一字一句生かせる一年間であるとともに、明るく・優しく・温かな人間になるよい出発を皆さまとともにできました。たくさんの方の支えがあり、無事に寒修行に参加できたことを皆さまと感謝させていただきましょう。」と述べた。

心を耕す教育者をめざして 教育者教育全国大会

2 月 11 日～12 日の 2 日間、立正佼成会本部の法輪閣及び第二団参会館において「平成 24 年次全国教育者研究会」が開催された。全国から教育関係者 600 名が参加し、京都教会からは 2 名が参加した。

本年のテーマは「心を耕す教育者をめざして：～絆こころ　ひとつに」として基調講演・夜間選択プログラム・実践発表・講義などを通して、互いの学びを深めた。基調講演では、千日回峰行を成した福聚山慈眼寺住職・塩沼亮大阿闍梨が登壇し、「同じことの繰り返しで、真実や、自分の欠点や成長も見え、周囲の支えに気づかされる。そして心の訓練が出来るのではないか。身を削るくらい仕事に打ち込み何かを得てこそ喜びや成長を味わえる」と参加者に訴えた。

2 日目の実践発表では、福島県の教員が教師になった喜び、東日本大震災で被災した体験と、現場での実践を通して得た喜びを伝えた。最終講義では、教育者教育研究所専門所員の大谷津氏が、仏教教育学の視点から、「ありがとう」の一言が教育を変えると話し、教育者自身が率先して実践を行い、善悪の正しい判断力と自主的な行動を促すことが教育者に求められる資質だと講義し、最後に「あかるく・やさしく・あたたかい教育者になりましょう」と訴えた。

私たち右京支部です！　～活動紹介～

◆明社ユニホームを着用し清掃活動◆

右京明社では数年前から、各種行事や活動時に団体名を明確にするためユニホームを作成しようと検討を重ねていた。昨年の総会において作成することに決定した。ポリエステル製のベストタイプで背面に「右京明社」の文字を入れた。毎月の清掃奉仕日や各種募金活動時、その他右京明社をＰＲするために有効な行事開催時に着用する。昨年８月の清掃奉仕日から着用し、11 月に実施した嵐山クリーンキャンペーンでも使用した。道行く人から「ご苦労さん」とよく声を掛けられるようになったという。今後もユニホームを活用し運動の輪を広げていきたい。

●法を立てる

（佼成会のことば）

常に法を中心として行動することを教えている言葉です。布教に出たときなど、自分の都合を言ったり、相手の言い分ばかり聞いて歩いていると、「あなたは人を立てて、法を立てなさい」とご指導されました。これは仏・法・僧の三宝に帰依し、尊い教えをもととして布教しなければ、仏さまのご守護はいただけないし、本当の修行にはならないことをわかっていただくために使われた言葉です。また自分がかかわったことで他人が悩みから救われた時も、自分の力でその人が救われたのでなく、教えのお陰で救われたという謙虚さを身につけるために「法を立てる」大切さが教えられてきました。

今月の言葉　～心の安定を得る～　京都教会長・佐藤益弘

先月下旬から日本列島は、日本海側を中心に大雪に見舞われています。観測史上最大の記録更新も相次ぎ、除雪作業に追われるなど大変ご苦労されていらっしゃいます。また、インフルエンザも流行しています。お互いさま気象情報に関心を持ちつつ、健康管理にもいっそう留意させて頂きたいと思います。

さて、今月は機関誌『佼成』において、会長先生から**「まあ、座れ」**というご法話をいただきました。その中にも「毎年この時期は、受験や進学、就職や転居など、さまざまな変化を見越して何かと気持ちが落ち着きません」とあります。そういう時だからこそ、安定した心でいることが大切であると教えて頂きました。

私は、法話全体を大きく分けて３つの安心があると受け取らせていいただきました。１つ目は、身の構や姿勢など、かたちを調えることで得られる**「かたちの安心」**です。２つ目は、自分のいのちの尊さ・有り難さに気づくこと、つまり根源の命というものの自覚に立つことで得られる**「こころの安心」**です。３つ目は、自分の安らぎを他の安らぎへと広げていくなかに、**「ほんとうの安心」**があるということです。

単身生活をしている私は、自宅におりますと誰も見ていないから大丈夫だという思いから、椅子に座りながら背もたれに寄り掛かったり、足を組んでみたり、つい姿勢は乱れがちになります。そういう意味では、自宅のご宝前で座って読経供養させて頂くお蔭様で、姿勢が正され、心が落ち着くように思います。第一、読経中にイライラしたり、怒るということは有りません。もちろん文句を言ったりもしません。かたちが整えられることに依り、落ち着きを取り戻し、気持ちが安定するということを朝に夕に体験させて頂いているわけです。何とも有り難いことだと思います。

また、ご法話の後段に、座るということに合わせて朝夕の読経と法座修行により、**心の安定が得られる**と書かれています。丁度、本会は今年から「各家ご命日」の一層の推進が図られています。自分の家のご命日を大切にし、家族でお給仕やご供養を行うことで、いのちのつながりを感じ、先祖を敬う機縁とするものであります。そして、ご宝前を中心とした明るく・優しく・温かい家庭づくりを目指すものであります。この方針に基づいて、私も先月から教会幹部のお家のご命日にお参りをさせて頂き、ご供養の後に、そこにお集まりの信者さんと法座をさせて頂いております。そのことを通してお互いさま心の安定を得て参りたいと願っています。

自分の安らぎを他の安らぎへと広げていくなかに、ほんとうの「安心」があると会長先生はお話を結ばれています。このお言葉にふれて思いますのは、子守歌をうたってくれた母親の姿であります。わが子の肩を軽くたたきながら優しい歌声で寝かしつけてくれた母のぬくもりは今でも忘れません。そのような子を慈しむ親心そのものが**「ほんとうの安心」**であると思う次第です。私も親に倣って身近な人々に安らぎをもたらせるよう菩薩行に励んで参りたいと存じます。

今月も宜しくお願い申し上げます。

三毒を滅し、心を清める節分会

２月３日、節分会が京都教会で行なわれた。

読経供養後の決意発表で年男・福娘を代表し２名の方から発表があった。また記念品授与では佐藤教会長から年男・福娘は記念品を、厄年の方はお守りを一人ずつ受け取った。

その後、佐藤教会長は説法の中で会長先生の法話を引用し、節分の意義を説明。「三毒（貪・瞋・痴）を滅するとともに良い方向に転換していく、自分の心を清め、心の大掃除が大事である」と述べた。また恵方巻きにもふれ「その年の良いとされる方角（今年は北北東）に向かって巻き寿司を食べることであり、無言で目を閉じて一本食べるのは縁を切らないことを意味し、巻き寿司は福を巻き込むことを意味する」など、関西を基点として全国に広まりつつある習慣を、参拝者に説明した。

最後に節分とは節目々々に「分ける」ことであり、幸せをお分けする、喜びをお分けするふれあいが大事だと述べ、開祖さまや会長先生のエピソードを分けて締めくくった。

その後、赤い法被を着た年男・福娘 64 名が一斉に豆まきを行った。近所の信者さんや家族に分けるため、全員が豆を拾いあった。

翌日の立春から新しい年まわりになることから、この日、今年の運勢（九星のおみくじ）が用意され、参拝者が持ち帰った。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

≪第４回世界宗教者平和会議≫

IARF 世界大会が終わって 1 ヶ月もたたない 8 月 23 日、ケニア共和国の首都ナイロビで、第 4 回世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰⅣ）が開幕した。第 1 回の京都会議以来、14 年の歳月が経過していた。第 2 回会議はヨーロッパで、第 3 回はアメリカでと、すべて先進国で開催されてきた。第三世界で開かれるのは、このナイロビ会議が初めてだった。

アフリカは世界の苦悩を凝縮した地域と言われる。世界の最貧国といわれる 36 ヶ国の内、27 ヶ国がアフリカに存在し、貧困、飢餓、難民、人権侵害など、いくつもの大問題を抱えている。そのアフリカが抱える様々な問題は、発展途上国が共通して抱えている問題なのである。第 4 回世界宗教者平和会議は、こうした諸問題に直面して宗教者に何ができるのか、厳しく自問させられる会議になることが予測された。

ケニヤッタ国際会議場で開会した会議には、60 ヶ国から 600 人の宗教者が集い、参加国数と参加者数で、最大規模の会議となった。会議出席者の過半数は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカからの宗教者で占められた。それぞれの国の苦しみの現実と向かい合い、その実情を訴える場を求めている宗教者がどれほど多いか、そのまま物語っていた。集まった世界の宗教者の多くが、世界宗教者平和会議を自分たちの平和の願いを訴え、対話する場と考えるようになってきているのが、ひしひしと感じられた。

アフリカには、「クモの巣も一緒になればライオンを捕らえることができる」ということわざがあるというが、人はクモよりも力を持っている。宗教者が協力すれば、さらに大きな力を発揮できるはずだ。アフリカは苦難の歴史を背負っている。現地の宗教者のこんな訴えもあった。**「キリスト教の布教者がやって来て、『目をつむって祈れ』というので、私たちはその通りにした。ところが目を開けてみたら、すべてを奪われていた」**と。

ナイロビ会議のメイン・テーマは「人間の尊厳と世界平和を求めて」と定められていた。南アフリカ・キリスト教協議会の事務局長を務め、人種差別反対運動の先頭に立ってきた聖公会のデスモンド・ツツ主教は、アパルトヘイト（人種隔離）政策の実態と宗教史の使命について、強い口調で訴えた。

南アでは、アパルトヘイトによって市民権を奪われ、住んでいる土地から強制的に追い出されている人々が 300 万人もいるという。**「南アは、輸出できるくらい食料がある国なのです。しかし、黒人は政府の政策によって飢えに追い込まれ、自分の生まれた土地に帰ることもできません。南アにおける黒人の自由は植民地時代より悪い状態にあります。500 万人足らずの白人が高い生活水準を享受する一方で、２ 千数百万人の人間が貧困にあえいでいるのです」**

ツツ主教は、この会議の 2 か月後に、ノーベル平和賞を受賞されている。「人間の尊厳、社会主義および全人的開発」をテーマにした研究部会では、日本での被差別部落問題について、部落解放同盟の上杉佐一郎委員長が、その歴史と実情を世界の宗教者の前でつぶさに訴えた。これは、ＷＣＲＰ日本委員会が上杉氏に友愛代表として会議への参加と発言を要請して実現したものであった。

この第 4 回世界宗教者平和会議には、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世特使として、ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官のフランシス・アリンゼ大司教が出席された。第 1 回の京都会議の時から、私たちはバチカン代表の参加を要請し続けてきたのだが、ナイロビ会議でようやくバチカンからの参加が得られたのであった。これまでもカトリックの枢機卿や大司教の方々が多数、会議に参加されてはいたが、バチカンからの正式代表を迎えるのは初めてであった。

バチカンからの参加を得て、ＷＣＲＰはその規模と内容において名実ともに、「世界の諸宗教対話の場」になったと言っていいだろう。ヨハネ・パウロ二世から会議に寄せられたメッセージには、深い祈りが込められていた。**「みなさまの討議によって、世界という一軒の家の中で、伝統の異なる宗教者同士が、より密接な協力の道を発見することになりますように。そして、正義と平等がすべての人に対して行き渡り、人間と国家に真の平和の基盤ができますように」**

≪アフリカへ毛布をおくる運動≫

ナイロビ会議の成果の一つとして「ＷＣＲＰ宗教間プロジェクト」が新たな事業として誕生した。その活動の一環として、アフリカ内の難民と干ばつ被害者を救済するプロジェクトがスタートし、40 万ドルの予算が計上された。　(つづく)

渉外部からのメッセージ

教会の成人式で、祖母が使っていた帯をしめて着物を着た新成人に出会いました。そのお母さんに話を聞くとご自身の節目の時にも身に付けていたそうです。その話を伺って、自分は日本人でよかったと感じました。決して洋服は代々着られないということではありませんが、脈々と受け継がれる着物の帯にあたたかさや生命の息吹を感じずにはいられませんでした。法燈もしっかり継承できる自分でありたいと思います。

この月報はホームページでもご覧頂けます。
アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/